

2018年8月23日／浪宏友ビジネス縁起観塾

渴愛と苦悩

1. 概要

(1) 資料

増谷文雄著『阿含經典1』（ちくま学芸文庫）／存在の法則（縁起）に関する經典群／因縁相
 応より、33 取著：五支縁起に関する資料：5月24日に学習

37 識：十支縁起に関する資料：6月21日に学習

1 法説：十二支縁起に関する資料：7月26日に学習

庭野日敬著『法華三部經 各品のあらましと要点』佼成出版社

(2) 主題

浪宏友ビジネス縁起観塾では、これまでに、「五支縁起」「十支縁起」「十二支縁起」について学んできました。今回は、これらを見比べながら、学んでいきたいと思います。

2. 縁起支の数

阿含經典で、私が出会った縁起説には、次のようなものがありました。

十二支縁起	無明、行、識、名色、六処、触、受、愛、取、有、生、老死・愁・悲・苦・憂・悩
十一支縁起	行、識、名色、六処、触、受、愛、取、有、生、老死・愁・悲・苦・憂・悩
十支縁起	識、名色、六処、触、受、愛、取、有、生、老死・愁・悲・苦・憂・悩
九支縁起	名色、六処、触、受、愛、取、有、生、老死・愁・悲・苦・憂・悩
八支縁起	六処、触、受、愛、取、有、生、老死・愁・悲・苦・憂・悩
七支縁起	触、受、愛、取、有、生、老死・愁・悲・苦・憂・悩
五支縁起	愛、取、有、生、老死・愁・悲・苦・憂・悩
四支縁起	取、有、生、老死・愁・悲・苦・憂・悩
三支縁起	愛、取、老死・愁・悲・苦・憂・悩
変則	識、有、老死・愁・悲・苦・憂・悩

それぞれの出典は次の通りです。

十二支縁起：「法説」（増谷文雄編訳『阿含經典1』ちくま学芸文庫、p.127）、

十一支縁起：「沙門・婆羅門」（同書、p.150）、十支縁起：「識」（同書、p.242）、九支縁起：「名色」（同書、p.240）

八支縁起：「外道」（同書、p.181）、七支縁起：「苦」（同書、p.214）、五支縁起：「取著」（同書、p.233）

四支縁起：「三昧」（同書、p.387）、三支縁起：「触」（同書、p.270）、変則的なもの：「思量（1）」（同書、p.205）

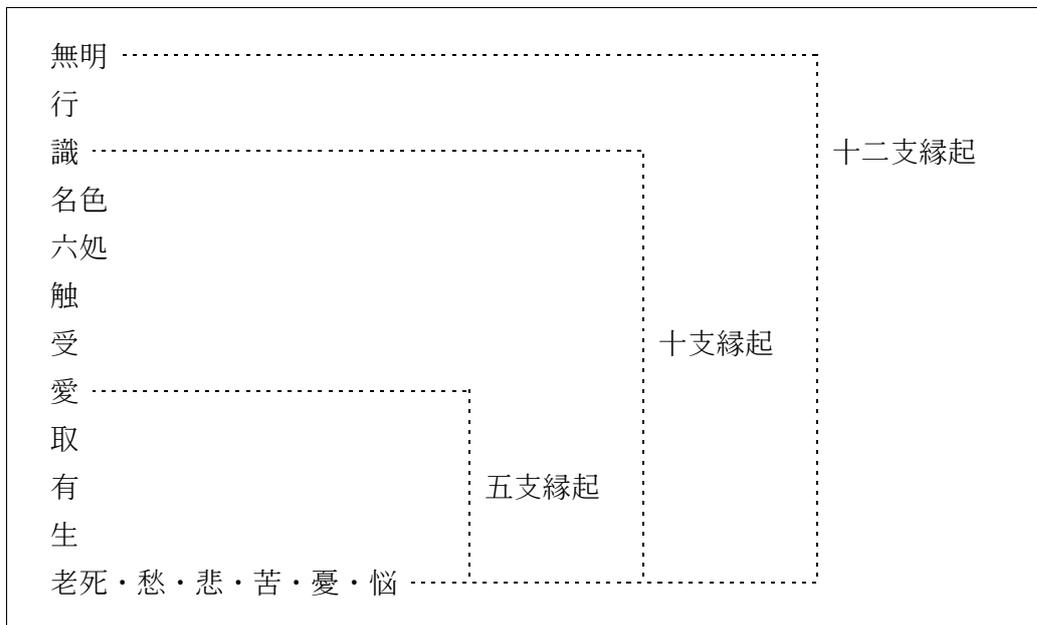
3. さまざまな縁起説が説かれた理由

釈迦牟尼世尊は、相手に応じ、場合に応じて、教えを説き分けました。

縁起説も、また、相手に応じ、場合に応じて、さまざまに説き分けたので、このように多くの縁起説が生まれたのでありましょう。

4. 三つの縁起説

さまざまな縁起説がありますが、私は、「五支縁起」「十支縁起」「十二支縁起」の三つを基本と考えています。



5. 五支縁起一流転縁起

(1) 経文「取著」

「比丘たちよ、取著するものを味いながら観ていると、その人には愛著の念がいやましてくる。愛によって取がある、……有……、生……。生によって老死・愁・悲・苦・憂・惱が生ずる。かくのごときが、このすべての苦の集積の生ずる所以である」（増谷文雄編訳『阿含經典1』ちくま学芸文庫、p. 233）

(2) 渴愛の発生

「取著するものを味いながら観ていると、その人には愛著の念がいやましてくる」とあります。
 「取著するもの」すなわち「好きなもの、欲しいもの」に気持ちを傾けていると、愛著（執着する気持ち）がますます大きくなって渴愛となります。この渴愛が、苦悩の原因となるのです。

6. 五支縁起—還滅縁起

(1) 経文「取著」

「しかるに、比丘たちよ、取著するところのものを、これはいけないぞと観ていると、その人には、愛著の念が滅する。愛が滅すると取が滅する。……有……、生……。生が滅すると老死・愁・悲・苦・憂・悩もまた滅する。かくのごときが、このすべての苦の集積の滅する所以である」(同書、p. 234)

(2) 渴愛を滅する

「取著するところのものを、これはいけないぞと観ていると、その人には、愛著の念が滅する」とあります。

「取著するもの」つまり「好きなもの、欲しいもの」に心を奪われないように気をつけていれば、愛著(執着する気持ち)が無くなります。それによって、渴愛も無くなります。

渴愛がなくなれば、苦悩は生じなくなるのです。

7. 五支縁起の要点

執着の対象に心を奪われないように気をつけよう。そうすれば渴愛が生じないから、苦悩は生じないと、五支縁起は私たちに呼びかけています。

8. 十支縁起—流転縁起

(1) 経文「識」

「比丘たちよ、繫縛するものをじっと味い観ていると、その人には識(意識)が現われてくる。その識によって名色がある。……六処……、触……、受……、愛……、取……、有……、生……。生によって老死・愁・悲・苦・憂・悩が生ずる。かくのごときが、このすべての苦の集積の生ずる所以である」(増谷文雄編訳『阿含經典』ちくま学芸文庫、p. 242)

(2) 識が現れる

「繫縛するものをじっと味い観ていると識が現れてくる」とあります。「繫縛」は、五支縁起の経文における「取著」と同じと考えてよいと思います。

「繫縛するもの」すなわち「好きなもの、欲しいもの」ばかりに気持ちを傾けていると、渴愛に汚染された「識(意識)」が生じるのです。

(3) 人間性の形成

十支の流転縁起では、識によって名色があり、名色によって六処があるとなっています。渴愛に汚染された人間性が形成されるのです。

9. 十支縁起－還滅縁起

(1) 経文「識」

「繫縛するものを、これはいけないぞと観ていると、その人には、識は現れてこない。識がないから名色もない。……六処……、触……、受……、愛……、取……、有……、生……。生がないからして、老死・愁・悲・苦・憂・悩もないのである」（同書、p. 243）

(2) 識が生じない

「繫縛するものを、これはいけないぞと観ていると、その人には、識は現れてこない」とあります。

「好きなもの、欲しいもの」に心を奪われないように気をつけていれば、渴愛に汚染された「識」は現れません。したがって渴愛に汚染された「名色」「六処」も現れません。こうして、渴愛に汚染された人間性が形成されなくなるのです。

10. 十支縁起の要点

執着の対象に心を奪われないように気をつけよう。そうすれば、渴愛に汚染された人間性が形成されなくなるから苦悩は生じなくなると、十支縁起は私たちに語りかけています。

11. 十二支縁起－流転縁起

(1) 経文「法説」

「無明によって行がある。……識……、名色……、六処……、触……、受……、愛……、取……、有……、生……、生によって老死・愁・悲・苦・憂・悩が生ずる。かかるものが、すべての苦の集積のよって起るところである」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、127-128）

(2) 無明

① 「無明」とは「四つの聖諦に対する無智」です。四つの聖諦を知らない、実践できないために、渴愛を減することができません。

② この理論では、自分がすでに渴愛を持っていることが前提になっています。

無明なるがゆえに、すでに持っている渴愛を減することができません。このため、渴愛の行ないが継続し、渴愛が増大し、苦悩が深まることを述べていると見ることができます。

(3) 渴愛と無明の関係

① 渴愛が智慧のはたらきを阻害して無明になるという一面があります。

② 無明であるために、「執着から欲望が生じ、欲望が増大して渴愛になる」というプロセスを防ぐことができないという一面があります。

③ 無明であるために、渴愛を正当化し、さらに増大するという一面があります。

1 2. 十二支縁起一還滅縁起

(1) 経文「法説」

「無明を余すところなく離れ滅することによって行は滅する。……識……、名色……、六処……、触……、受……、愛……、取……、有……、生……、生の滅することによって老死・愁・悲・苦・憂・悩が滅する。かかるものが、すべての苦の集積のよって滅するところである」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.128）

(2) 無明を滅する

経文に、「無明を余すところなく離れ滅することによって行は滅する」とあります。

無明が滅するとは、四つの聖諦を知り、実践できるようになることを意味しています。これによって、渴愛を滅することができます。渴愛を滅すれば、渴愛に汚染されない「行」が生じ、そこから渴愛に汚染されない「識」が生じます。

「識」が渴愛に汚染されていなければ、十支縁起、五支縁起が述べるように、苦悩は生じなくなるのです。

1 3. 十二支縁起の要点

四つの聖諦を学び、実践して渴愛を滅しよう、そうすれば苦悩は生じないと、十二支縁起は、私たちに語りかけています。

1 4. 縁起説の要点

(1) 三つの縁起説の要点

① 五支縁起の要点

執着の対象に心を奪われないように気をつけよう。そうすれば渴愛が生じないから、苦悩は生じないと、五支縁起は私たちに呼びかけています。

② 十支縁起の要点

執着の対象に心を奪われないように気をつけよう。そうすれば、渴愛に汚染された人間性が形成されなくなるから苦悩は生じなくなると、十支縁起は私たちに語りかけています。

③ 十二支縁起の要点

四つの聖諦を学び、実践して渴愛を滅しよう、そうすれば苦悩は生じなくなると、十二支縁起は、私たちに語りかけています。

(2) 共通すること

三つの縁起説に共通するキーワードは、「渴愛」です。

渴愛があれば、渴愛の人生を送ることとなり、苦悩に満ちた人生になってしまうのです。

渴愛を滅すれば、渴愛の無い人生となり、苦悩は生じなくなるのです。

(3) 三つの縁起説の関係

- ① 五支縁起は、渴愛が生じると、渴愛の毎日を送ることとなり、苦悩の人生が生じますと語っています。
- ② 十支縁起は、執着に汚染された人間性が形成されると、渴愛が生じることが述べられています。そのさきは、五支縁起に戻ります。
- ③ 十二支縁起は、既に渴愛があることが前提となっています。

既に持っている渴愛を減することができないので、渴愛の行いが生じ、渴愛に汚染された人間性が育まれることが述べられています。その先は、十支縁起、五支縁起に戻ります。

(4) 無明と渴愛を減する

苦悩の根本原因である「無明」と「渴愛」を減する道は、やはり、八支の聖道です。自燈明・法燈明の姿勢で、八支の聖道に取り組むほかありません。